

学校における人権・同和教育の推進

～子どもから差別的な発言が出てきたときの教職員の対応～

1 はじめに

2 子どもから差別的な発言が出てきたら

(1) 自分だったらどう対応するか、考えてみましょう。(5分)

★授業中に、子どもAが「シンショウ!」と発言しました。

※「シンショウ」…「身体障害者(児)」「ガイジ」「ガイシャ」と使われることも。



(2) 小グループで、考えを交流してみましょう。(10分)

3 教職員がすべき基本的な対応とは (10分)

4 ロールプレイで、やってみましょう! (10分)

5 おわりに

◆対応すべき発言とは

「ケガれる」「黒人」「雑種」「オカマ」「※賤称語」「せんそうじゃんけん」など

※「賤称語」とは、中学校社会科で学習する江戸時代の身分呼称

◆対応のポイント

- ①まず、() すること。
- ②() ではなく、() 力を育てる。
- ③差別とたたかってきた人々の() に出会う。
- ④ピンチを() に!

教職員がすべき基本的な対応とは

1 事実確認

「何があったの？」

「何が言いたかったの？」

「言われて、どんな気持ちだった？」



◆トラブル解決

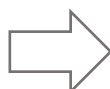
◆関係修復へ

※まず、事実や状況を確認することが対応の第一歩です。発言に関わった子どもたちだけでなく、まわりの子どもたちからも情報を得ることが重要です。

「どうしてその言葉を使ったの？」

「その言葉をどこで知ったの？」

「その言葉の意味を知ってる？」



◆学び直しの

授業の実施へ

※その言葉の意味や使い方について、子どもたちはどのような認識をもっているのか、その認識はどこからきたものなのかを把握できれば、どのような学び直しの授業やその後の対応をすべきかが見えてきます。

2 学び直しの授業

- ①「クラスで起こった事実」や「関係する子どもたちの思い」を共有する。
- ②言葉の意味を学び、その言葉を発言することの意味を理解する。
- ③差別をなくそうとしている社会（世の中）の動きを知る。
- ④同じことを繰り返さないために（みんなが安心して笑顔で過ごせるために）どうしたらいいかを自分たちで考え、行動に移す。

ロールプレイ「シンショウ」

1 授業中に言葉が発せられた場面

- 子ども A：「シンショウ！」
- まわりの子ども：(笑い)
- 教師：「今、Aさんはなんて言ったの？」
- まわりの子ども：「シンショウです。」
- 教師：「シンショウって何？」
- まわりの子ども：「失敗した人のことです。」
- 教師：「みんなこの言葉を普段から使っているの？」
- まわりの子ども：「みんな言ってます。」
- 教師：「そうなんですね。この言葉は、とっても大切な言葉だから、これからみんなで学習していきましょう。その学習をするために、みんなにもいろいろ相談すると思うから、そのときは協力してね。」

※授業を中断し、自習ができるようにしてから、2を行う。

※授業が中断できない場合は、次の授業時間を自習にし（または、他の教師に頼み）、2を行う。

2 事実確認（子どもたちからの聞き取り）

(1)発言したAさんへの聞き取り

- 教師：「じゃあ、まずAさんから協力してね。Aさんはどうしてさっきの授業中に『シンショウ』って言ったの？」
- 子ども A：「Bさんが、落ちた消しゴムをとろうとして、机に頭をぶつけたからです。」
- 教師：「じゃあ、Bさんに向かって言ったんだね。Bさんのことが嫌いなの？」
- 子ども A：「嫌いじゃありません。遊びのつもりで言いました。」
- 教師：「なるほど。この『シンショウ』って、ある言葉を短くした言い方なんだけど、何の言葉を短くした言葉か知ってる？」
- 子ども A：「知りません。」
- 教師：「この言葉をどこで知ったの？」
- 子ども A：「野球の練習試合で、相手チームが言っていたので知りました。」
- 教師：「そうだったんだね。じゃあ、今度みんなでこの言葉について、きちんと勉強してみようね。協力してくれてありがとう。」
- 子ども A：「はい。」

(2)発言された B さんへの聞き取り

- 教師：「今日、A さんから『シンショウ』って言われたよね。その時、B さんはどう思ったの？」
- 子ども B：「机に頭がぶつかっただけなのに、みんなに笑われて嫌でした。」
- 教師：「そうだよね。B さんは、他の人からも『シンショウ』って言われたことあるの？」
- 子ども B：「時々言われます。何人かの人が言っているのです、言われたことあるのは自分だけじゃないと思います。」
- 教師：「じゃあ、嫌な気持ちになっているのは B さんだけじゃないってことだね。知っている範囲でいいので、言っている人と言われている人を教えてくれる？」
- 子ども B：「言っているのは、多分 C さんと D さんで、E さんも言われたことあると思います。」
- 教師：「そうなんです。わかりました。ところで、B さんは、『シンショウ』って、何の言葉を短くした言葉か知ってる？」
- 子ども B：「知りません。何の言葉ですか？」
- 教師：「それは、今度みんな勉強しようと思っています。先生も、B さんみたいに嫌な思いをする人をなくしたいので、協力してね。今日は、話してくれてありがとう。」

(3)E さん、C さん、D さんへの聞き取り

※省略

(4)A さんと B さんの関係修復

- 教師：「『シンショウ』っていう言葉について、二人とも今日、話を聞かせてくれたよね。B さんは、『シンショウ』って言われてどう思ったのかな。」
- 子ども B：「バカにされたみたいで、嫌でした。」
- 教師：「A さんは、B さんのことが嫌いで『シンショウ』って言ったのかな。」
- 子ども A：「ちがいます！ちょっと遊びのつもりで言いました。」
- 教師：「そうだったよね。A さんは B さんが嫌いで言ったんじゃない。それは、B さん、わかった？」
- 子ども B：「はい。」
- 教師：「A さんは遊びのつもりで言ったんだけど、B さんは嫌な気持ちになった。それは、A さんわかった？」
- 子ども A：「はい。」
- 教師：「今回は、こんなことになってしまったけど、先生は同じことを繰り返さないようにしたいんだけど、あなたたちはどう？」
- 子ども A、子ども B：「そう思います。」
- 教師：「じゃあ、これからどうしたらいいと思う？」

- 子ども A：「もう『シンショウ』って言わない。」
- 子ども B：「みんなで『シンショウ』って言わないようにする。」
- 教師：「じゃあ、これからそれをやってみようか？」
- 子ども A、子ども B：「はい。」
- 教師：「この言葉の意味とかについては、クラスの間みなとも勉強してみるから、あなたたちが今日話し合ったことも紹介していい？」
- 子ども A、子ども B：「はい。」

3 学び直しの授業

- 教師：この間、このクラスの中で「シンショウ」という言葉が出たよね。その後、何人かの人に協力してもらって、この言葉がどんなふうに使われているのか、教えてもらいました。この間この言葉を言った Aさんは「遊びのつもりで言った」、言われた Bさんは「言われて嫌だった」と話してくれました。その後、AさんとBさんと先生とで、これからどうしていったらいいか話し合いました。Aさんは「この言葉を言わないようにする」、Bさんは「みんなでこの言葉を言わないようにする」と言ってくれました。なので、今日はみなともこの言葉について、考えてみましょう。
- 教師：「シンショウ」という言葉を聞いたことがある人は、手を挙げてください。
- 子どもたち：(何人か手を挙げる。)
- 教師：「なるほど。じゃあ、この言葉を聞いて、うれしかったり、楽しかったりする気持ちになった人は手を挙げてください。」
- 子どもたち：(誰も挙げない。)
- 教師：「じゃあ、逆に何か嫌な気持ちになった人は手を挙げてください。」
- 子どもたち：(何人か手を挙げる。)
- 教師：「今、嫌な気持ちになったと手を挙げた人は、正解です。なぜだと思いますか。」
- 子どもたち：「人が嫌がる言葉だから。」「使ってはいけない言葉だから。」
- 教師：「なるほど。実は、この『シンショウ』っていう言葉は、ある言葉を短くした言葉です。何の言葉か知っている人いますか。」
- 子ども F：「身体障がい者」
- 教師：「Fさん、よく知っていましたね。そうなんです。『シンショウ』っていう言葉は、『身体障がい者』、つまり体が不自由な人のことをバカにするためにつくられた言葉なんです。みなさんは、体の不自由な人を差別しようと思いますか。」
- 子どもたち：(横に首を振る。)
- 教師：「そうですよね。でも、みなさんたちが遊びで『シンショウ』と言っていたことは、まわりの人から見ると、体が不自由な人を差別していることだったんです。」
- 子どもたち：「えー！」「そうなの？」「知らなかった。」

- 教師：「知らないって怖いですよ。体の不自由な人をバカにすることを『障がい者差別』といいます。そして、この国には『障害者差別禁止法』という法律（国の決まり）もあります。知っていましたか？だって、差別する人がいたらパラリンピックなんてできませんよね。差別する人がいなくなれば、差別もなくなるんですね。」
- 教師：「そもそも、できること・できないことって一人ひとり違いますよね。それをお互いにバカにするようなクラスがいいですか？嫌ですよ。じゃあ、何かできないで困っていたり、失敗したりしてしまったとき、みんなだったらどうしてほしい？」
- 子どもたち：「教えてほしい。」「助けてほしい。」「励ましてほしい。」
- 教師：「そうだよね。そんなクラスがいいよね。じゃあ、これからどうしたらいいと思いますか。みんなでアイデアを出し合って、いいクラスにするためのルールをつくらう！」

※授業後には、授業の様子や子どもの感想などを校内で共有しましょう。また、校内での話し合いのもと、学級通信で保護者に伝えたり、発言のもとになった社会体育の指導者の方に報告したりすることも検討しましょう。

その他の発言が起こったときの対応例 ※あくまで一例です。

(1) 「ケガれる」

子ども：「近づくな！ケガれる！」

教師：「今、『ケガれる』って言ったよね。『ケガれる』って、どう言う意味？」

子ども：「え、わかりません。汚れること??」

教師：「じゃあ、教えるね。服に泥がついたときには、『汚れる』っていうよね。『ケガれる』とは言わないよね。『汚れる』っていうのは、目に見えるヨゴレのこと。『ケガれる』っていうのは、目に見えないヨゴレのことなんだね。どうして、見えないんだと思う？」

子ども：「そんなの、わかりません。」

教師：「そうだよね。先生は、そんなものはそもそもないから見えないんだと思うよ。あなたはさっき、〇〇さんに『ケガれる！』って言ったけど、『目に見えないヨゴレがつく！』って言いたかったの？」

子ども：「いや、そうじゃないです。」

教師：「だよ。だったら、『ケガれる』って言っても何も伝わらないよね。何があったのか、あなたが〇〇に伝えたかったことは何だったのかを先生に話してくれる？そしたら、どう言ったらあなたの気持ちが〇〇さんに伝わるか、先生も一緒に考えることができるよ。どう？」

子ども：「わかりました。実は、…」

※言われた子どものケアや子ども同士の関係修復も行う。

(2) 「黒人」

子ども：「黒人！」

教師：「黒人って、どういうこと？」

子ども：「肌の黒い人のことです。」

教師：「そうだね。肌の黒い人たちのことを『黒人』と呼ぶことがあります。その呼び方だったら、あなたは何色人になるか知ってる？」

子ども：「え、知りません。」

教師：「あなたは、『黄色人』ということになります。」

子ども：「えー、黄色じゃないよ。」

教師：「そう思うでしょ。肌の色というのは、一人ひとり違うし、違っていてもあたりまえだよ。あなたが使っている色鉛筆や絵の具にも『はだ色』っていうのはありません。それは、肌の色で人をいじめたり、バカにしたりして差別する人がいたから、その差別をなくすために、『はだ色』もなくなったんだよ。この肌の色による差別は、今は

だんだんなくなってきています。それは、世界中の多くの人たちがこの差別をなくすためにたたかってきたからです。そんな人たちのこと、知ってる？」

子ども：「知りません。」

教師：「じゃあ、今度『はだ色』のことや、肌の色の差別とたたかってきた人たちのことを、クラスみんなで勉強してみようか。」

子ども：「はい。」

※言われた子どものケアや子ども同士の関係修復も行う。

※「はだ色鉛筆」や「肌の色による差別とたたかってきた人々」についての授業を計画・実施する。授業を実施する際には、保護者や関係機関とも相談して実施する。

(3) 「雑種」「ハーフ」

子ども：「雑種！ハーフ！」

教師：「どうして、そんなこと言うの？」

子ども：「〇〇さんは、お父さんが□□人だし、髪の毛の色も違うから、遊びで言いました。」

教師：「あなたのふるさととは、一つ？それとも、二つ？」

子ども：「え、意味が分かりません。」

教師：「ごめん、ごめん。言い直すね。あなたは、小さいときからずっとこの地域に住んでるの？それとも、どこかから引っ越したことがあるの？」

子ども：「小さい頃、一度引っ越しました。」

教師：「じゃあ、あなたには『ふるさと』が二つあるんだね。こんなふうに、ずっとここに住んでいてふるさとが一つの人もいれば、あなたみたいに引っ越しをしてふるさとがいくつもある人もいる。それは、おかしいことじゃないよね。」

子ども：「はい。」

教師：「同じように、外国にふるさとがある人もいる。これもおかしくないよね。」

子ども：「はい。」

教師：「ふるさとが一つの人はその地域のことをよく知っているし、ふるさとがいくつもある人は違う地域のことも知っている、外国にふるさとがある人は外国のことも知っている。そしたら、いろんな地域のことがわかるよね。楽しいと思わない？」

子ども：「まあ…」

教師：「さっきあなたは『雑種』『ハーフ』っていう言葉を使ったけど、今は『ハーフ（半分）』じゃなくて、外国にふるさとがある人は『ダブル（ふるさとが2つ）』という言い方をしたりするんだよ。知ってた？」

子ども：「はじめて聞きました。」

教師：「じゃあ、今度クラスみんなで『自分のふるさと紹介』をしてみようか。いろんな新しいことが勉強できるかも知れないね。どう？」

子ども：「はい。なんか面白そうですね。」

※言われた子どものケアや子ども同士の関係修復も行う。

※国内・国外を問わず、いろんな地域の出し合い、みんなで学ぶ授業を計画・実施する。

授業を実施する際には、保護者とも相談して実施する。

(4) 「オカマ」

子ども：「オカマ！」

教師：「オカマって何？」

子ども：「男のくせに、女っぽい人のことです。」

教師：「その言葉、どこで知ったの？」

子ども：「みんな遊びで言ってますよ。」

教師：「その言葉、テレビとかでは使われていないの知ってる？」

子ども：「え、そうなんですか？」

教師：「そうなんだよ。あなたは、性は男と女の2つだけだと思ってない？」

子ども：「そうじゃないんですか。」

教師：「うん。性は男と女の2つだけじゃないっていうのが、あたりまえになってきているんだよ。だから、テレビでも『オカマ』なんて言葉、使わないんだね。だって、そんな言葉を使っていると、『性のことを勉強してない、わかってない』ってみんなに思われてしまうからね。」

子ども：「そうなんですか。」

教師：「それは、先生があなたに教えていなかったこともいけなかったので、今度性についてみんなで勉強してみようか。」

子ども：「はい。知りたいです。」

※言われた子どものケアや子ども同士の関係修復も行う。

※性の多様性についての授業を計画・実施する。授業を実施する際には、校内や保護者・関係機関とも相談して実施する。